ルース・オゼキ（Ruth Ozeki）の *A Tale for the Time Being*（『あるときの物語』）について

田　中　泰　賢

この作品を早川書房から上下 2 巻本で日本語に翻訳出版した田中文（たなか ふみ）氏は「訳者あとがき」で次のように述べている。

> ルース・オゼキ（Ruth Ozeki）は1959年、（アメリカ）コネチカット州ニューヘイブンでアメリカ人の父と日本人の母のもとに生まれた。スミス大学で英文学とアジア研究を学び、卒業後は奈良女子大学の大学院で日本の古典を研究するかたわら、京都の飲み屋街でバーのホステスとして働いたり、生け花や能楽を習ったり、京都産業大学で英語を教えたりした。その後、ニューヨークでドキュメンタリー映画の製作に携わったのち、1998年に『イヤー・オブ・ミート』*My Year of Meats*（佐竹史子訳、アーティストハウス）で小説家デビューし、2003年には二作目となる *All Over Creation* を発表し、環境政治学、科学技術、グローバル・ポップカルチャーなどの問題を独自なハイブリッドな語り口で鋭く、ときにユーモアたっぷりに切り取る手腕が世界の批評家から高く評価された。2010年に曹洞宗の禅僧となり、現在はニューヨークとブリティッシュコロンビアを行き来して生活している。夫は環境芸術家のオリバー・ケルハンマーである。[1)]

ルース・オゼキは英文学、アジア研究にとどまらず、日本の大学で日本の古典を学び、京都の飲み屋街で働いている。日本の様々な表情を実地に体験しているところにこの作家の探求心を感じる。松永京子氏はルース・オゼキの第一作目の小説『イヤー・オブ・ミート』（*My Year of Meats*, 1998）と第二作目『オール・オーバー・クリエーション』（*All Over Creation*, 2003）について研究されている。氏は「『イヤー・オブ・ミート』の畜産のナラティブに構築された

巧緻な戦争科学と農業の関係性は、『オール・オーバー・クリエーション』でさらに前景化され、遺伝子組み換え作物に連繋する戦争科学の問題にまで発展している」[2)]と論じている。また結城正美氏はルース・オゼキの作品について研究発表している。氏は「食をテーマとするOzekiの次の二つの作品、合成女性ホルモン剤DESによる食肉と環境と人間の身体の汚染を描いた*My Year of Meats* (1998) と、遺伝子組み換えじゃがいもをめぐる農家や環境活動家の物語を描いた*All Over Creation* (2003) に共通する特徴を指摘し、二項対立的な概念世界を揺さぶるOzekiの文学実践を分析した」[3)]と述べている。

仏教僧という視点から書かれたのがこの『あるときの物語』である。この物語の構成が曹洞宗の修行僧が使う応量器に似ている。応量器とは修行僧が食事に用いる器である。一番大きい器に次に小さい器が入るといったように一番小さい器まで収まる入れ子式になっている。この物語の登場人物の一人、ルースは海岸でフリーザーバッグを見つける。その中に日記らしきもの、手紙などが入っている。その日記の表紙はフランス語であるが、中に書かれているのは大半が英語で、日本語も混じっている。その日記の書き手はヤスタニ・ナオという日本人である。そして書き手のナオはひいお婆ちゃん、言い換えるとヤスタニ・ジコウ（禅宗のお坊さん）の人生を語り伝えるための日記だと書いている。ルースの中に日記等が収まり、その日記の表紙はフランス語で、その中は英語と日本語で書いたナオという女性が収まり、その中にひいお婆ちゃんが収まっている。応量器のようにきちんと収まっている。

あるとき（夏休み）、ナオは父親と共にひいお婆ちゃんの住んでいるお寺を拝登（はいとう、お参りすること）する。夜、ひいお婆ちゃんはお風呂に入る時、次のようなお祈りをした。

As I bathe myself
I pray with all beings
that we can purify body and mind
And clean ourselves inside and out.[4)]

禅の修行道場では次のような言葉を唱える。

沐浴偈
沐浴身体　当願衆生　身心無垢　内外光潔[5)]（もくよくしんたい　とうがんしゅじょう　しんじんむく　ないげこうけつ）
お風呂に入る時はあらゆる存在と共に願いましょう
身も心も洗い流して、光り輝くように。

道元禅師は身も心も洗うのは仏陀の教えに基づくものであり、全てが清らかに輝くと説いている。仏陀はまずお袈裟を洗いそして体と心を洗い菩提樹のもとで坐禅をして成道したと言われている。だから沐浴は仏陀の作法であり、私たちの作法でもある。そして道元禅師は次のように述べている。

> 心の働きもまた思考し、解釈して自分で善し悪しときめられません。思考・概念に染まる以前の静寂な心は人間の汚染した観念で捉えられません。体も心も計れないのですから、沐浴という慮り・働きも同様に分別出来ないのです。この無限の大きさを取り上げて悟りを行動に実証するそれが仏陀と祖師が大切にしてきたことなのです。自我の計らいを先にせず、その計らいを実体とこだわるべきではありません。そのようなわけですから、このように沐浴し洗濯して自我を超えた身心の無限性を徹底して清らかにするのです。たとい地・水・火・風の四大の条件が合成した肉体とはいえ、たとい色…体と・受・想・行・識の意識活動の合成縁起した命であっても、たとい趙州が言ったように縁起・無常な命の事実こそ確かだとしても、沐浴すれば、身も心も自我のこだわる心はさわやかになるのです。[6)]

ナオはこの偈を少し大げさだなと思ったけれど、しかし銭湯で体を洗っていたバーのホステスたちもお風呂から上がり、とても清潔できれいになっているようであったことを思い出している。(It seemed like a big deal to go through, but then I thought about the bar hostesses at the sento and how clean and pure they seemed after their baths.)[7)] ナオは日本のお風呂の入り方を説明している。日本ではその浴槽のお湯を皆が使用するので、その浴槽に入る前に体をよく洗って、汗やほこりなどを落とすのが作法である。西洋では一人が入るたびに浴槽のお湯を捨てて、新しいお湯を入れ替える。これではお湯がたくさん必要になってしまう。日本ではお湯を節約して大切に使うというのがお風呂の原点である。

ナオはこのお寺では沐浴の時だけでなく、顔を洗う時も歯を磨く時もお便所に行く時も私たちとは異なる所作があると語る。(And talking about rules, the two of them had all these crazy routines they did for every different kind of thing you can imagine, like washing their faces or brushing their teeth, or spitting out their toothpaste, or even going for a crap.)[8)] ここで使用されている “crazy” は必ずしも悪い意味ではなくて「熱心な」とか「真面目な」という肯定的な表現である。だから “these crazy routines” は「顔を洗う時も、歯を磨く時も、お便所に行く時も真面目な日課」と理解することができる。

道元禅師は洗面について次の様に述べている。

洗面は西のインドから伝わり東のチーナ（秦）国に広がりました。諸学派の律の記録にはっきりしているのですが、やはり仏方や禅の祖師方が伝えたのが純粋な跡継ぎのありかたです。略。ただ垢と脂を取り除くだけでなく仏と祖師の清浄な命と心を伝えるものです。[9)]

洗面の偈（言葉）は次の通りである。

手執楊枝　当願衆生　心得正法　自然清淨（しゅじゅうようじ　とうがんしゅじょう　しんとくしょうぼう　じねんしょうじょう）
(楊枝をとるとき)[10)]

楊枝とは現代でいえば歯ブラシに相当する。上の言葉は「歯ブラシを取る時はあらゆる存在と共に願いましょう　心に正法を得て　自ずと清淨になるように」と解される。次の偈が続く。

晨嚼楊枝　当願衆生　得調伏牙　噬諸煩悩（しんしゃくようじ　とうがんしゅじょう　とくちょうぶくげ　ぜいしょぼんのう）
(楊枝を使うとき)[11)]

上の言葉は「歯ブラシを使う時はあらゆる存在と共に願いましょう　丈夫な歯を得て　あらゆる煩悩をこそぎ落しますように」と解される。道元禅師の教えを建学の土台とする愛知学院に歯学部が設けられているのはふさわしいといえよう。更に偈は続く。

澡漱口歯　当願衆生　向浄法門　究竟解脱（そうそうくし　とうがんしゅじょう　こうじょうほうもん　くぎょうげだつ）
(口をすすぐとき)

この言葉は「口をすすぐ時はあらゆる存在と共に願いましょう　汚れを取り、仏の教えに進み　この上ない悟りをえますように」となる。『僧堂の行持』では「口歯をすすぐに当に願わくは衆生　浄法門に向って解脱を究めおわらん」[12)]と説明されている。最後に次の偈を唱える。

以水洗面　当願衆生　得淨法門　永無垢染（いすいせんめん　とうがんしゅじょう　とく

じょうほうもん　ようむくぜん）
（顔を洗うとき）[13)]

「お水で顔を洗う時はあらゆる存在と共に願いましょう　大切な浄水を得たことを感謝して長くお水を汚さないようにしましょう」と意訳した。

ナオはお便所に行った時の偈を次のように書いている。

As I go for a dump,
I pray with all beings
that we can remove all filth and destroy
the poisons of greed, anger, and foolishness.[14)]

ナオは最初こんな言葉を嫌っていたけれど、徐々になじんできて、ある日トイレを使用した後 “Thanks, toilet”[15)]（ありがとうね、トイレさん）と言うようになった。

洗浄の偈は次の通りである。

左右便利　当願衆生　蠲除穢汚　無淫怒癡（さゆうべんり　とうがんしゅじょう　けんじょえお　むいんぬち）
（大小便所に入るとき）[16)]

この偈は『華厳経』淨行品によるという[17)]。

「大小便の時あらゆる存在と共に願いましょう　体の毒素を取り除き　むさぼり・怒り・愚かさの三毒もなくすように」。

偈は続く。

已而就水　当願衆生　向無上道　得出世法（いにしゅうすい　とうがんしゅじょう　こうむじょうどう　とくしゅっせほう）
（お水を使う前）[18)]

「お水を使用する前にあらゆる存在と共に願いましょう　仏の教えに心を向けて　仏道のダルマを具えるように」。

そしてお水を使う時の偈が続く。

以水滌穢　当願衆生　具足淨忍　畢竟無垢（いすいできえ　とうがんしゅじょう　ぐそくじょうにん　ひっきょうむく）
（お水を使うとき）[19]

「お水を使用し、手を洗う時にあらゆる存在と共に願いましょう　寛容でどこまでも裏表がない人でありますように」。

以上の作法は確かに修行道場ではふさわしい。けれどひいお婆ちゃん、ジコウ禅僧もわかってくれたけど、中学校のトイレでこんな作法をしたらいじめられてしまうからやめたほうがいいとナオは思った。ジコウ禅僧も “but that it was okay just to feel grateful sometimes, even if you don’t say anything. Feeling is the important part. You don’t have to make a big deal about it.”[20]（まあ時々感謝する気持ちを持つだけで良いよ。心持が大切な要素だから。もったいぶることは要らない）と同意してくれた。

ブッダの十大弟子の一人、サーリプッタ（舎利子又は舎利弗）は大小便を洗う作法によってバラモンを教化した。「ある時、サーリプッタの洗浄の作法を観たバラモンは感動して比丘（仏教僧）になった」[21]。ここで下線を引いたある時は（傍点は筆者）この作品の題名『あるときの物語』のある時を示している。さきほど述べた歯を磨く時、お便所に行く時、手を洗う時、等全てある時である。あるとき、あるときに真摯に取り組む。それがある時であろう。

「（ある時、）バラモンは托鉢から戻って足を洗う舎利子又は舎利弗の姿を見て、歓喜心を発し、さらに舎利弗の説法を聞いて仏に帰依する心を持ったという」[22]。ナオはひいお婆ちゃんと一緒に足洗い場に行って、偈を次のように唱えている。

When I wash my feet
May all sentient beings
Attain the power of supernatural feet
With no hindrance to their practice.[23]
（私が足を洗う時 / あらゆる存在が / 無事に修行をするために / 優れた足の力を得られますように）

「経行（きんひん、坐禅堂では坐禅の間、規則正しい歩みでゆっくりと歩くこと）が終わってさらに端正に坐禅しようとするならかならず足を洗うといいます。足が汚れて不浄に触れるわけではないが、仏陀や祖師の作法はそのようにしています」[24]。

アメリカの動物行動学者のテンプル・グランディン氏は「文明社会なら、どこでも礼儀作法があります。たとえば、「どうぞ」とか「ありがとう」と声をかけ合います。このようなルールが大切なのは、ほんとうに悪い行為に至りかねない怒りをふせぐためです」[25)]と述べている。なぜ礼儀が必要であるかという理由をグランディン氏は的確に説明している。礼儀作法によってお互いの心が安らぎ、優しい気持ちにつながっていく。

ナオはひいお婆ちゃん、ジコウ（禅尼僧）ともう一人の尼僧、ムジとお寺の台所で大根の漬物作りの手伝いをした。ひと段落した後、ジコウ尼僧はナオと足を洗った。その時の偈が上の言葉である。そしてジコウ尼僧はナオを本堂に連れて行った。二人はお線香をつけ、焼香してから坐禅に入っている。

ナオは坐禅について次のように思った。

> Zazen is better than a home. Zazen is a home that you can't ever lose, and I keep doing it because I like that feeling, and I trust old Jiko, and it wouldn't hurt for me to try to see the world a little more optimistically like she does.[26)]
>
> (坐禅は家よりいい。坐禅は絶対に失うことのない家で、そういう気持ちが好きなのと、ジコウおばあちゃんを信用しているから、わたしはずっと続けている。それに、ジコウを見習って、ちょっとだけ希望を持って世界を見たって害にはならないかなと思って。)[27)]

お風呂でナオはジコウお婆ちゃんに体の傷をみられてしまった。ナオはジコウお婆ちゃんにアメリカから日本の学校に転校した時、いじめられたことを話した。クラスメートはナオが死んだことにしてお葬式ごっこをした。その時、クラスメートが般若心経を唱えていたことなどを話した。ナオが話し終わるとジコウ尼僧はこう言った。

> "Well, Nattchan, you don't have to worry. You're not really dead. Your funeral wasn't real."
>
> I was like, Huh? I kinda already knew that.
>
> "They chanted the wrong sutra," she explained. "You do not chant Shingyo at a funeral. You must chant Dai Hi Shin."
>
> Then, before I could say how relieved I was, she said, "Nattchan. I think it would be best for you to have some true power. I think it would be best for you to have a superpower."[28)]
>
> (「心配いらないよ、なっちゃん。おまえは死んでない。おまえの葬式は本物じゃないもの」わたしは、は？　そんなのもう知ってるけどって思った。「その人たちはまちがったお経を唱えていたんだよ」とジコウは説明した。「お葬式で般若心経は唱えない。大悲心

陀羅尼を唱えなくちゃならないの」それ聞いてすごくほっとしたよって言おうとしたんだけど、その前にジコウはこう言った。「なっちゃん、お前は本物の力をつけたほうがいいね。スーパーパワーを身につけたほうがいい」。)[29]

『大悲心陀羅尼』について大野榮人氏は次のように述べている。

千手千眼観世音菩薩は、仏世尊(ほとけ)に次のようにいわれました。「仏世尊(ほとけ)よ、もし諸の人天がこの大悲心呪を誦持するならば、命の終わる時、十方の諸仏が必ず来(きた)ってお手を授け、その人の欲(のぞ)む仏土に導かれるであろう。仏世尊(ほとけ)よ、諸の衆生が有って、この大悲心呪を誦持するにもかかわらず、三悪道（地獄・餓鬼・畜生道をいう）に堕(お)ちるようなことがあれば、私（千手千眼観世音菩薩）は誓って自分だけの正覚(さとり)をとりません」。[30]

私たちの命が終わる時、大悲心陀羅尼を唱えると十方の諸仏が来て、仏土に導いて下さるという。しかし大野榮人氏は更にこう述べている。「いくら手や眼をさし向けてもらっても、千手千眼観世音菩薩の所在(ありか)を知らなければ、どうすることもできません。所在(ありか)を知るためには、私以外のすべての人々、それに山や河や樹木や大地、太陽や月、空気や水などの自分(わたくし)を生かし続けてくれるものに対して、手を合わせて祈(いの)ることです。いくら求めても、祈(いの)る心なしに千手千眼観世音菩薩の所在(ありか)を知ることはできません。祈(いの)るための呪文(じゅもん)が『大悲心陀羅尼』なのです」[31]。だからお葬式では「大悲心陀羅尼」は大切な呪文であることが分る。ジコウ尼僧はナオ（なっちゃん）に「本物の力、スーパーパワー」を身につけることを薦めている。この本物の力について石田稔一氏はこのように述べている。

私たちは社会生活をしている関係上、実に多くの頼りとするものを求めて生きています。親・妻・夫・親類・友人・知人・財産・健康など、よるべとするものは数多くあります。しかし、そのような一切のよるべを失ったとしても、最後に残るべきは、自己というよるべです。現代はあまりにも多くの人のぬくもりの中によるべを求めすぎていて、一人で孤独のうちに歩み続ける厳しさを忘れているようです。釈尊が、「おのれこそ、おのれのよるべ」と言っておられるこの自分とは、主体性を持った一箇の人格としての自己、義務や責任を負い、道徳的、社会的行為を実践して行く自己であり、平たく言えば、人間として正しく生きていく自分のことです。釈尊は、利己主義的で自分や自分のものに執着する自己を苦悩の原因として戒められる反面、人間として正しく生きる自己については、おのれのよるべとしなくてはならないと言っておられるのです。[32]

石田氏の言う「人間として正しく生きていく自分」がジコウ尼僧の述べる「本物の力、スーパーパワー」であろう。さきほどナオは「坐禅は絶対失うことのない家」と語っている。ナオにとっては坐禅はすばらしいよるべになっている。それは言いかえれば人間として正しく生きる自己をよるべとすることに他ならない。しかしナオはさりげない親切心が心を温かくすることも語っている。

> We were able to visit many parishioners who were old or sick, and sometimes when we visited them, I weeded their gardens, too.[33)]
> (病気のお年寄りの家をたくさん訪ねられたし、訪ねていったときにはわたしはときどき、庭の雑草抜きもした。)[34)]

ここもある時の話である。ある時、ナオは人生で長い経験をした人々に会い、その人たちから不思議なパワーをもらったのではなかろうか。そのパワーはジコウ尼僧の言っている本当の力であろう。それは石田氏の語っている正しく生きる自己のことであると思われる。その訪ねて行った先で草取りをするという貴重な体験を積むことができたのはスーパーパワーであろう。前のところで述べたブッダの十大弟子の一人、サーリプッタ（舎利子）はある時、祇園精舎（ぎおんしょうじゃ）の建立に尽力したスダッタ（給孤独（ぎっこどく））長者が重い病気になったとき見舞いに行った。食欲がなく、苦しい毎日ですという長者の言葉を聞いてサーリプッタは「長者よ、怖れることはない。あなたは人々のために布施（へつらうことなく、対価を目的とせず、心身のすがすがしい行い。例えばボランティア活動、災害義援金等々も含まれる）を行い、善慧（人を幸せにする知恵を施し)、また正見（人を貶めることのない言葉）に基づいて生活している。これらはみな、あなたの苦しみを無くし、元気を与える」と語った。長者はこの教えを聞いて、病気を回復したという[35)]。吉川武彦氏は専門家の立場から次のように述べている。

> 私は医学を学び、精神医学を出発点にして精神科医療に携わり、実地医療とは対極の保健福祉行政に研究面や実際面で深く関わってきましたが、健康と病気、病気と障害の間に“深くて暗い川”があるのではなく、また、健康と病気などの境目を人がつくっているとばかりはいえないのではないかと思っています。それはつまり、「健康のなかに病気が潜む」という考えをもつようになったということです。言い換えれば、“病気は健康の一形態”ということになりましょう。もともと人はまっさらで、それを健やかというなら、そこに病いや障害が点在するようになり、健康のなかに病気が潜んでいる状態になっていると考えるのです。健やかさという広大な地域に病いや障害が存在するのであって、その病

いや障害に陥ることのないように予防することも大事だが、いったん落ち込んでもその落とし穴を取り巻く環境がよければ、再び健やかな地を歩めると考えています。[36)]

さらに、吉川氏は次のように書いている。長くなりますが引用させていただく。

登校拒否・不登校・いじめ・自殺・盗み・性非行など、いま、子どもに関わる事件が頻発していますが、この問題を解くために、かつて私は“幼熟”といった、脆弱なこころの持ち主が増えていることを指摘しました。その意味では、“こころの子育て”こそ、いま、最もホットな精神保健福祉の問題なのです。精神衛生とか精神保健といわれてきたこれまでのメンタルヘルスは、精神障害者を病院や地域で支えるサポーティブ・メンタルヘルスではありましたが、これがサポーティブ・メンタルヘルスのすべてではありません。なぜなら、精神障害者だけがサポートを求めているわけではないからです。サポーティブ・メンタルヘルスを求めている人は子どもから老人までたくさんいます。そのことへの気づきが、登校拒否・不登校の子に対するフリースクールを生み出したのです。いじめを理由にして、転校も可能になりました。ボケ症状を示す人にもデイサービスが行われるようになりました。このリストラの時代、どのような人生選択をすればいいか悩んで孤立している人を、いったい誰が支えているでしょうか。シングルマザーやシングルファーザーが悩んでいるとき、いったい誰がどのように関わりをもっているでしょうか。[37)]

吉川氏の説明からサポーティブ・メンタルヘルスを求めている人は子どもから老人までたくさんいることがわかる。さきほどナオがお年寄りの家を訪問して草取りも行ったとある状況が吉川氏の言葉から頷くことができる。またこの作品『あるときの物語』ではいじめにあったナオ、ナオの父親のリストラ、ノイローゼで苦しんでいるナオの母親のことなどが書かれている。そういった問題に対して、吉川氏は「その目が輝いてこそ、追いつめられた人の現実を直視することができ、追いつめられてこころを病んでしまった人や精神障害に陥ってしまった人を暖かく見ることができるのではないかと思います」[38)]と述べている。

ナオは秋葉原のテレビ画面の前を通りかかかった時、テレビでは昆虫の戦いを映し出していた。アナウンサーはクワガタムシとサソリの戦いを大声で叫んでいた。敗者はクワガタです。死にました。サソリの勝ち。その時の様子をナオは次のように書いている。

I started to cry. I’m not kidding. Until then nothing could make me cry, not losing all our money, not moving from my wonderful life in Sunnyvale to a crappy dump in Japan, not my crazy mother,

> or my suicidal father, or my best friend dumping me, or even all those months and months of ijime. I never cried. But for some reason, the sight of these stupid bugs tearing each other apart was too much for me. It was horrible, but of course it wasn't the insects. It was the human beings who thought this would be fun to watch.[39)]
>
> （わたしは泣きだした。冗談抜きで。それまでは、どんなこともわたしを泣かせなかった。うちのお金が全部なくなったことも、サニーベールでのすばらしい生活をあとにして日本のしけたアパートに引っ越してきたことも、頭のおかしい母親も、自殺願望のある父親も、親友に捨てられたことも、何か月も、何か月も続いたイジメも。わたしは一度も泣かなかった。それなのになぜか、くだらない虫たちがおたがいを切り刻んでいる光景には耐えられなかった。あまりにひどすぎた。でもひどいのは、虫たちじゃなかった。そういうのが面白いって考えた人間のほうだった。）[40)]

テンプル・グランディン氏は自身の経験を語っている。「私はよくいじめられました。こどものころは、いじめられると相手に怒りをぶつけていました」[41)]。さらに彼女はこう語っている。

> あるとき食堂で盛大ななぐり合いをして、そのあとに乗馬をさせてもらえませんでした。馬に乗りたくてたまらなかった私は、喧嘩をしなくなりました。このおしおきは、効果抜群だったのです。それでも、腹の虫はおさまりませんでした。怒りのはけ口をみつけなければなりません――どうしても気持ちを断ち切れなかったのです。それで、いじめられたときには泣くことにしました。最近、学内乱射事件が多発していますが、少年たちが、怒りではなく、涙で気持ちを表現できるなら、あのような恐ろしい事件はなくなるのでしょうか。このような事件は、いじめが大きな要因になっています。私たちの社会では、男の子に強くなれと教えることが重視されすぎているのではないでしょうか。私は今でも、泣いて怒りを鎮めます。仕事中に怒りを爆発させたら大目に見てもらえないでしょうが、泣きたいときには、人のいないところで泣けばいいからです。[42)]

グランディン氏は泣くことによって怒りを鎮めているという。学内乱射事件の背後にイジメ問題を見ているのも鋭い指摘である。ナオもクラスでのパンツ事件というイジメを受けて学校を退学したいと思う。ナオは学校を辞めて尼さんになりたいと母親に言ったが反対される。結局、目の前に迫った入試はうけてみることになった。ナオがイジメを受けていた時、心を落ち着ける場所があった。それは近くのお寺の庭の石のベンチに座って時間を過ごすことだった。

お坊さんと私は互いにお辞儀をした。お坊さんは何も言わなかった。しかしお互いが礼儀正しいことによってナオは心が落ち着いている。東京からずっと遠いところのお寺の尼僧、ジコウお婆ちゃんが健康状態が良くないという知らせを受けてナオは仙台行きの新幹線に乗った。お寺に着くと、幸いにもお婆ちゃんは生きていた。寝ていたジコウは起きて、「生」という書を書き、しばらくして息を引き取った。

この作品を翻訳した田中文氏は題名を『あるときの物語』という日本語に置き換えている。これは道元禅師の意を汲んだ表現ではないだろうか。何故ならば成河智明師は次のように述べているからである。

> 「有」が存在であるという解釈はできない、というより無理なところがある。何故なら物の存在の次元と時（時間）の次元は全く異なるからである。また「有時」が特別の意味を持っているということは、この巻中には見あたらない。「有時」の巻の「有」が存在であり、「時」が時間であるとするならば、そのことが巻中のどこかに書かれているはずである。道元の著作は懇切丁寧であり、余すところがない。それなのに、有は存在であるとはどこにもない。それであれば「有時」は冒頭の古仏の言葉通り「有る時、或る時」であり、本文中にみられる「有」は「或」またはその文意から「連続する時間の中から取りだされた或る（時）」と考えるのがよいと思われる。[43)]

自然科学者でもあった成河智明師の説明は従来の考え方にとらわれず、わかりやすく説いているので納得できる。更に師は「自分が過去（の時間）を理解するというのは自分に関連ある物事がいつ生じたかを取り出して考えるのであるから、過去にいろいろの物事があると言うのは、結局時間の上に自分自身を並べる（排列する）ということである」[44)]と述べる。そして「普通、時間は皆に共通のものとして考えがちであるが、過去の「或る時」にそこで何が起きたか、何があったのかで時間が定まる。とすれば、時間は個々人によってまちまちである」[45)]と語る。そして「時を考える場合に、時は過ぎ去るものとすれば、過去に起きた事を現在から見ると、遠く離れてしまっていることになる。しかし、時は別の面がある。（略）その事象の時々に自分が居たのであり、自分がおり時もあるとすれば、有る時はそのまま現在の瞬間（而今）である[46)]」という。成河智明師は更に次のように説く。

> 一般の人でも、毎日の仕事において、計画を立てている。すなわち、何時になにをするか、誰と会うか予定を立て、それを実行している。その日時を取り去れば、ある時に何かをしたのであり、ある時に誰かにあったのである。しかし、このある時（時間）というの

は一般の人が定めたものでなく、仏の法（天然の理）が凡夫に関ったというのである。（略）ここで道元は明確に仏法で説く時間のありようを述べる。すなわち、凡夫がある時に釈尊をある時に明王を考えても、このある時が仏法とは考えないので、その人のものとはならないと言いきるのである。この世界で使われている時間は、午、未（正午、午後二時）というように並んでいるが、これは仏法によるのであるから、子（午前零時）もある時付けられた名であり、丑（午前二時）も時の名、生も死も時の名というだけである。こうして考えれば、全宇宙をある時という考えで明らかにできるという。ここで道元が明確にしているのは、時に特別の時は無く全て有時（ある時）として排列されるに過ぎない、つまり時間の次元だけということから、この世（尽界）を平等に見ることが出来ると説いているのである。[47)]

生も死も時の名という。そうすると、『あるときの物語』で「ジコウ尼僧が亡くなる時に「生」という書をしたためた。これは生と死がひとつであるとジコウが理解したことを示しており、したがってジコウは完全なる悟りを得たものと理解される」[48)]。これを仏法の観点からすれば、ジコウはある時亡くなったが、私たちが今考える時、ジコウは今私たちの前で発心し、修行し、成道し、涅槃に入っているのである。

注

1）田中文「訳者あとがき」ルース・オゼキ『あるときの物語』〔下〕（早川書房，2014），317頁。
2）松永京子「カルチャーとビジネスの狭間で――デイヴィッド・マス・マスモトとルース・L・オゼキの作品を中心にして」『アメリカ研究』（*The American Review*）2007(41): 113−131, 117頁。
3）結城正美「Ruth Ozeki のハイブリッドな食風景」『中部アメリカ文学』第18号（2015），33頁。
4）Ruth Ozeki, *A Tale for the Time Being* (Canongate Books Ltd, 2013), p. 164.
5）『勤行聖典』（曹洞宗大樹寺専門僧堂［当時］鳥取県八頭郡郡家町福地，1969），88頁。
6）『曹洞宗僧堂清規集成㈡』新井勝龍・大田大穣監修，中野東禅編著（四季社，2002），16−17頁。
7）Ruth Ozeki，同上，p. 164.
8）同上，pp. 166−167.
9）『曹洞宗僧堂清規集成㈡』，30頁。
10）『勤行聖典』（大樹寺），87頁。
11）同上引用文中。
12）楢崎通元編著『僧堂の行持』（瑞応寺専門僧堂瑞雲会、愛媛県新居浜市、1979），36頁。
13）『勤行聖典』（大樹寺），87頁。
14）Ruth Ozeki，同上，p. 167.
15）同上引用文中。ちなみに澤岡昭氏は宇宙トイレと高齢者トイレについて興味深い事を述べておられる。一

部抜粋引用させていただく。「今の宇宙ステーションにある2つのトイレは穴が10センチしかありません。その10センチの穴へ便を通さなければなりません。中は少し圧力を低くして空気の流れをつくっていますが、その流れが上手くつくられないと、重力がないため肛門から出た便がずっとついている状態になり、ちぎれても壁にべたっとついたりして汚れてしまうそうです。ロシアの宇宙飛行士は汚れたままでもわりと平気で掃除をしないそうですが、それが日本人宇宙飛行士は気になって、若田光一さんはいつもトイレ掃除をしていたそうです。そのせいで評判がよくなって船長になったという話もあるぐらいなんですよ。（略）高齢者が寝たきりの状態で排便することを考えると、宇宙トイレと高齢者のトイレは共通の部分が非常にあり、私は臭いの問題や、閉鎖空間での排便などの研究をしたいと思っています」（『ヘルシーなごや』60　平成30年春号，名古屋市医師会，01–02頁）。澤岡氏の研究が成就されることを願っている。

16）『勤行聖典』（大樹寺），87頁。

17）『原文対照現代語訳　道元禅師全集［第六巻］正法眼蔵6』［訳注］水野弥穂子（春秋社，2009），6–7頁。

18）『勤行聖典』（大樹寺），87頁。

19）同上引用文中。

20）Ruth Ozeki，同上，p. 167.

21）『曹洞宗僧堂清規集成㈡』，122頁。菅沼晃著『ブッダとその弟子89の物語』（法蔵館，2000）に依ると、「ある時、サーリプッタ（舎利子）はラージャガハの街かどで托鉢している一人の比丘に出あった。このときの模様は『律蔵』「大品」第一大犍度にくわしい。この比丘はアッサジといい、バーラナシーのミガダーヤ（鹿野苑）で最初にブッダの説法を聞いた五人の比丘の一人であった。アッサジの立ち居ふるまいが法にかなっているのを見て、心をうたれたサーリプッタがその師を問うと、ブッダこそ師であるとのこと。「仏陀は何をお説きになるのですか」と重ねて問うと、アッサジは「自分は入門して間もなく、ブッダの教えをくわしく説くことはできないが」と言って説いたのが次の詩句であったという。「如来はもろもろの存在は原因より生じる。如来はその原因をお説きになった。もろもろの存在の止滅をもお説きになった。偉大な沙門はこのようにお説きになった。」この詩句を聞き終わると、ただちに、サーリプッタに清らかな真理を見る眼（法眼）が生じたという。ここで説かれたのは「縁起」の教えであり、これによってサーリプッタは仏弟子となったのである」（76頁）。サーリプッタの大小便を洗う作法によってバラモンが仏教僧になったこと、アッサジの立ち居ふるまいの作法等によってサーリプッタがブッダに帰依したことをみると、法にかなった作法の大切さを教えられる。

22）中村晋也『釈迦と十人の弟子たち』（河出書房新社，2003），82頁。

23）Ruth Ozeki，同上，p. 177.

24）『曹洞宗僧堂清規集成㈡』，22–23頁。

25）テンプル・グランディン（Temple Grandin）『自閉症感覚　かくれた能力を引き出す方法（The Way I See It: A Personal Look at Autism & Asperger's）』中尾ゆかり訳（NHK出版，2014），207–208頁。

26）Ruth Ozeki，同上，p. 183.

27）田中文訳『あるときの物語［上］』著者：ルース・オゼキ（早川書房，2014），273–274頁。

28）Ruth Ozeki，同上，p. 176.

29）田中文訳『あるときの物語［上］』，264頁。

30）大野榮人『和訳大悲心陀羅尼――千手千眼観世音菩薩のお経』（仏典現代語訳研究会，天寧寺内，1984），16–17頁。

31）同上，19–20頁。

32）石田稔一（いしだ・みのいち）『般若心経読解（はんにゃしんぎょうどっかい）』（近代文藝社，1996），62頁。
33）Ruth Ozeki，同上，p. 205.
34）田中文訳『あるときの物語［上］』，304頁。
35）山辺習学『仏弟子伝』（法蔵館，1984），52–58頁参照。
36）吉川武彦（きっかわ・たけひこ）『「こころの病い」事始め――精神障害者問題入門』（明石書店，1998），13–14頁。
37）同上，14–15頁。
38）同上，15頁。
39）Ruth Ozeki，同上，p. 291.
40）田中文訳『あるときの物語［下］』，117–118頁。
41）テンプル・グランディン，同上，179頁。
42）同上，179–180頁。
43）成河智明『道元を求めて 一　正法眼蔵 二十　有時について』（長圓寺，2003），7頁。
44）同上，18–19頁。
45）同上，22頁。
46）同上，25頁。
47）同上，33–34頁。
48）田中文訳『あるときの物語［下］』，232頁。